からっぽ詐欺師と嘘の世界

空閑終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
からっぽ詐欺師と嘘の世界

【Ｎコード】
Ｎ８９４７Ｙ

【作者名】
空閑終

【あらすじ】
精神病患者数、自殺者数、犯罪者数、自然災害数が過去最多とされる２０××年――有名占い師から「世界終了」の予言が世間に放たれた。疲れ切った現代の人々はその予言を、殆どの人が疑わず信じた。しかし、そんな世界をどこか冷めた目で見つめる少年――稍仰木彰は、ある時、巫女をしている同級生――加藤夜輪梨から、「世界は終わらない」という予知を告げられる。神を信じるか、世界を信じるか――自身を詐欺師と呼ぶ少年の、現実を真実一色に塗り替える為の物語。

（1）世界終了

家に帰って唖然とした。
「何だよこれ……！」
胸に留めるだけにしたかった言葉が、開いた口から洩れる。
心当たりもないのに、勝手に頭が今までの事を思い出し始める。
いつもと変わらず学校から出て、僕は家に入るためカギを開けて――……。思い出していても意味がない事に溜息を吐きだし、とりあえず冷静さを保とうとしてみる。
そして、荒れに荒れまくった自宅を、真っ黒な目で見つめた。
「……ただいま」
ひとり呟くように響かせる声が、ひどく空しい。
感情さえ押し殺して「いつも通り」を貫こうとする僕は、もしかしたらとてもおかしいのかもしれない。
けれど、それも僕なのだ。
今更何を言ったところで、もうなおるような性格じゃない。
海外出張中の両親を思い出して申し訳なさに涙が浮かびそうになるが、それをこらえてドアのカギを内側からかける。
自然と漏れる溜息に逆らわず、若干大袈裟に息を吐き出して。
「いつも通り」、僕は家の中へ踏み込んだ。
「酷いなこりゃ……」
無言の冷たい時間が嫌で、わざと声を出して心情を晒してみる。
全ての部屋のドアは開けっぱなしで。
衣服等タンスの中の物は殆ど乱雑に床に散らかされて。
毎日掃除を欠かさず、綺麗さを保っていた自分の家だとは思えない。
見てみると自分の部屋の窓があいていたから、なるほど此処から何者かが入ってきて、そしてこうして、出ていったのだろうと、納得した。
これからは窓のカギまでチェックしてから出かけないと……。

いきなりの惨状に掃除する気も起きず、まずテレビをつけてみた。
画面に映るアナウンサーのお姉さんが、淡々とどこかの現実を読み上げている。
『精神病患者数、自殺者数、犯罪者数、大規模な自然災害数が過去最多を迎えていた事が判明しました――』
「ボロボロだな、この世界」
なんとなく言いながら、悲しくなる。
「そういえば、何か取られたものとか無いのか……」
僕は無くなった物を探そうと、つけっぱのテレビに背を向け――緊急速報の音を聞いた。
思わず振り返る。
『ニュースの途中ですが、只今速報が入りました――』
『今年１２月１０日に世界は終わると、占い師の奈割ルピ（なわり・るぴ）さんが――』
　奈割ルピ……。
最近増えてきた自然災害なんかの日付を全て当てたことで有名になった、現役占い師の女性だ。
画面がアナウンサーから、その奈割ルピの映像に変わる。
カメラのフラッシュがばちばちと、彼女を照らす。
『確かに見えたのです。間違いありません。今年１２月１０日に、世界は終わる――世界終了の時が来るのです』
記者がさらなる情報を聞き出そうとしているようだが、彼女、奈割ルピは『そんなに急に聞かれては、見えるものも見えません』と胡散臭く断っていた。
――心の中で、「そんな終わるわけないだろ」と笑う半面、案外当たっているかもしれないとも思う。
精神病患者、自殺者、犯罪者、自然災害の数がどれも過去最多を記録してしまった現代、もう何処で何が起きてもおかしくはないだろう。
僕だってこうして空き巣に入られてしまったし。

誰もが闇と病みをもっている、疲れ切った世界だし。
「……」
……そういえば、同じクラスの加藤……。
「あいつ、予知能力があるとか言ってったっけ。神の声がどうたらこうたらって……」
加藤とは小学生からの付き合いであり、それ故それを聞いたのは小学生のころだった。
当時は皆加藤の言う予知能力を笑っていたが、その言葉を覚えていた僕は知っている。
加藤は今年起きた大災害の日付を、確かに当てていた事を。
加藤は笑われて以来その手の話をする事は無くなってしまったけれど、あれがまぐれじゃなかったとしたら、奈割ルピの言う世界終了についても何か知っているかもしれない。
明日聞いてみようと思いつつ、僕は無いもの探しを始めた。
もともと物の少ない家だ。
何かないのならすぐに気付きそうなものだし――というか、そんな家から犯人は何を取っていったんだろう？
疑問符を浮かせながら、掃除も同時進行させていくのだった。
頭の隅に、世界終了の予言をひっかけながら――。

（2）嘘吐き

「……何も、無くなってない？」
家中隅々探しまくったが、無くなっているものは見つけられなかった。
やっぱり僕が気づいてないだけかもしれないけれど、見つからないものは見つからない。
仕方ないかと呟いて、僕は家の中をぐるりと見回した。
あれから若干雑にではあるが掃除を終えたので、帰ったばかりのころと比べると「いつも通り」に近づいたように見えた。
これ以上はどうしようもないので、携帯で時間を確認すると、現在はどうやら２０時０５分らしかった。
……そろそろ、あの人が来る時間だな。
僕は台所に行き、掃除したりないところが無いか見て回った。
そんな事をしていると、インターホンが鳴った。
「あ、はい！　今開けます！」
駆け足で玄関に行ってカギを開け、ドアを開く。
ドアの外には、小武海渚（こむかいなぎさ）さんがいた。
「やあ彰くんー、お邪魔するよー」
「はい、いつもありがとうございます……！」
小武海渚さんはお母さんの友達で、出張が多い両親の代わりにこうしてご飯を作りに来てくれる女性だ。
確か今年で２５歳になるはず……だが独身。
彼氏募集中とか言っていたっけな、立候補してみようかね。
「私は年上好みなの」
「はいぃっ！」
心を読まれた……だと……！
いろいろはいったスーパーの袋を台所までもっていきながら、小武海さんが此方をニヤニヤ見てくる。

「変な事言ってやろうって顔してたわよ」
「そんなばかな」
「わかりやすいもんねぇ、彰君は――ところで、彰君」
小武海さんを迎え入れてドアのカギを閉めると、小武海さんは袋から野菜などを取り出しながら訊いてきた。
「今日、家散らかしたの？」
「えっ？」
思わず疑問符のついた言葉を返してしまう。
「いや、彰君が綺麗好きじゃない？
　その割になんか……今日は、ねぇ」
言葉を濁し、小武海さんは苦笑いした。
僕は本当の事を言おうかどうか迷って、結局
「ああ、今日は探し物してて……その時に」
と嘘を吐いたのだった。
小武海さんは「そっか」と言ってくれた。
わかってくれたようだ。
僕は台所を通ってリビングのソファに腰掛けた。
「探し物って何よー、テストでも隠してた場所忘れた？」
「なっ……僕は生まれてこの方満点しか取った事のない男ですよ」
「はいはい、そうでしたねー」
ううむ……上手く無視された？
小武海さんが夕食の準備をしている間、僕は今日の宿題を片付ける。
今日の宿題は少ないので、すぐに終われそうだ……。
「あ、そういえば！」
ノートに教科書を写していると、小武海さんは大きな声を出した。
驚いて振り向き、小武海さんを見る。
「彰君知ってるー？　あの奈割ルピが世界終了宣言って！」
「あ、ああ……」
急に何事かと思ったらそれか……。
僕はノートに滑らせるシャーペンを止めずに頷いた。

「びっくりよねぇ、今って１１月２６日じゃない？　どうなるのかな……」
「……小武海さんは信じてるんですか？」
「んー……」
小武海さんは少し悩むような素振りを見せたが、やがて「そうだね」と声を発した。
「もう酷い世界だしさ、此処」
「……」
「信じたくもなると言うか、やっぱり？　って感じかな」
「なるほど……」
確かに、そうかもしれない。
僕も心のどこかでやっぱりそうなのかと頷いているのかもしれない。
それが普通の反応だとしたら、僕の反応も普通のそれであってほしい。
「彰君は信じてないの？」
小武海さんからの小さな質問。
僕は、何故かシャーペンの動きが止まるのを感じた。
何で手を動かそうとしないんだろう、僕は。
「……僕は、いや、僕も同じように思いました」
「やっぱりそうだよねー」
こんなところでも嘘しか言えない僕もまた、普通なのだろう。
普通の反応を夢見る普通の一般人。
僕は宿題に戻った。

＊＊＊

「今日はカレーだよー」
小武海さんの明るい声に呼ばれ、僕は席に着いた。
「材料が安かったのでねー。これならしばらくおいても大丈夫だし」
「いつもすみません……」

「子供が変なこと気にしないの！　中学生で今大変な時期だろうし、少しお手伝いしてるだけよ」
うう、そう言われると勉強しないといけなくなる……。
「勉強しなさいね」
「は、はい」
テレビではバラエティ番組が流れて、カレーを食べながら小武海さんが偶に笑っている。
最初は家族でもない人の前でご飯を食べるのには中々抵抗があったのだが、今はもう慣れた。
正直、今では小武海さんといるのは楽しくて、良い時間だと思えるほどだ。
――小武海さんは僕が食べ終わると、食器を洗うところまでしてくれてから帰った。
謝ると、「そんな事言わないの」と小突かれた。
空き巣に入られた事を告げられないまま帰らせてしまった事を後悔はしていない。
こんなんだから嘘を吐くのがやめられないのだと、今少しだけ自分に怒りたくなったけれど、まあそれだけだ。
僕はお風呂に入るため、着替えの準備をした。

（3）情報

風呂というかシャワーで済ませるのが基本なので、男だからという事を抜いても上がる時間は速い。
適当に済ませてあがると、つけっぱなしのテレビから奈割ルピの声が聞こえた。
『今年１２月１０日に世界が終るのは間違いないでしょう。
まず、全国各地で地震が頻繁に起こるようになります。
それから――』
頭をタオルで拭きながらテレビの前まで来て、よくそのテレビを見てみる。
奈割ルピはのフードの付いた、紫のローブの様なものを羽織って会見に臨んでいた。
はっきりいってめちゃくちゃ胡散臭い外見だ。
それに加えアニメ声であるからなのか、いまいち真剣味が伝わらない。
あぁ、これは別にアニメ声の人を否定してるわけではない。
寧ろ僕はアニメ声大好きというか若干声フェチの気があるので、どちらかというとアニメ声というのは褒め言葉の部類に入るくらいなのだ。
……まあそれはさておき。
「占い師、ねぇ」
僕は占いとか、あまり信じない部類の人間だ。
女子なんかは占いとか好きな子が多い気がするけれど、さっきも名前を出した加藤って全然そんな雰囲気ないんだよな……。
加藤――加藤夜輪梨（かとうよわり）。
家はここらで有名な神社で、そこで巫女をしている女の子だ。
あまり話した事はないので詳しい事はわからないが――一匹狼タイプなのは間違いないだろう。

誰かに媚びたり、誰かとつるんだり、そういう事をしているところを見た事が無いし。
「……」
話しかけたら、無視されたり変な事言われたり……しないよな？
世界終了の事を聞こうと思うが、まさか怖い事には……。
「僕どんだけびびってるんだ……」
そうそう、相手だって人間だ。
それも小柄な女の子だぞ？
精神的なダメージに弱すぎる僕が、偶にこうして嫌になる。
けれどそれだって僕の一部で、現実で。
愛せなくとも受け入れなくてはならない事実なのだ。
　だしっぱにしていた宿題を回収して、テレビの電源を消した。
ここらの電気も消して、僕は自分の部屋に入る。
宿題の終わって無かった所を集中して早く終わらせ、時間を確認。
「２２時３４分、か」
夜更かし常習犯の僕には早すぎる時間だ。
僕はパソコンの電源を入れた。
ネットで世界終了の事について何か書かれていないかと思ったのだ。
パスワードを入れ、ボックスに「世界終了」と入れて検索する。
３２，８００，０００件出た……！
当然僕が探しているのとは違う物も入っているのだろうが、何この数字。
世界にはこんなに厨二病が溢れかえっているのか？
「って、ああ、最近もあったんだよな」
奈割ルピの少し前に、ネットでだけ注目されたようなされてないような、そんなニュースが。
「言ってる奴だけでこんなに対応も変わるのか……」
何か恐いなぁと思いつつ、目当ての情報を探してみる……が、あまり良い物は出てこない。
流石にこの調子で全件まわるわけにいかない、というかそれは少し

ふざけている。
今度は「奈割ルピ」で検索してみた。
すると、なんと彼女がやっているブログを発見することが出来た。
ブログタイトルは『奈割ルピの占い部屋だぉ（≧ω≦。）』……あらまあ。
因みに記事はギャル文字全開だった。
いったいどんな人間なのこの人は。
慣れないギャル文字を我慢して今日の記事を見てみると、今日の会見の事が書いてあった。
そしてお目当ての、世界終了についても――と思ったのだが、自身の感想ばかりだった。
終わるの怖いとか終わるの嫌とか。
そんな事が顔文字や絵文字、そしてギャル文字で書き綴られていた。
コメント欄はどうなっているのかと目を通して見ると、案の定ギャル文字の多さに心が折れた。
辛いので、「奈割ルピ」で某巨大掲示板サイトを見てみる。
世界終了を喜ぶ人らばかりだった。
「……駄目だ……」
ニュース以上の情報は手に入りそうな気配がない。
やはりここは素直に待って、明日、加藤夜輪梨に話を聞いてみた方がよさそうだ。
その結果が残念だったとして、別に興味だけで調べているのだから後悔も何もない。
僕はパソコンをシャットダウンする。
今日はいつもより早めに眠ることにした。
時間割を整え、布団を敷き、最後戸締りを確認して――
「おやすみ」
最後の最後、電気を消し。
誰にともなく言って、瞼を下ろした。

（4）加藤夜輪梨

翌日、僕はいつもより早く家を出た。
これは単にいつもより早めに起床してしまったからであって、深い意味はない。
本当なら加藤夜輪梨（かとうよわり）の来る時間に合わせたかったのだが、その時間もつかめていないし……必然、マイペースとなった。
まだ静かな教室へと足を踏み入れる。
やはり来るのが早すぎたかなと時計を見れば、7時35分だった。
学校が開くのは7時30分。
「そりゃ早いわ」
「――早いわね」
誰もいないはずの教室から声がして、驚いて、声がした後ろの方へ体を向ける。
そこには、黒い長髪を揺らしながら席へつこうとする、加藤夜輪梨がいた。
「稍仰木（ややうき）君って、いつもこんなに早いの？」
「え、あ、いや……今日はたまたま、早く目が覚めちゃって……」
「あら、そうだったの」
帰る頃には眠いわね、とにこりともせず僕の横をすり抜け、自分の席に座る加藤。
もしかしたら今がチャンスかもしれない、と、僕は勇気を振り絞って加藤に話しかけた。
加藤の机の前にお邪魔して。
「あ、あのさ、加藤？」
「何かしら」
此方をきりっと一直線に見つめてくる加藤の目に怯みつつ、僕は言葉を紡ぐ。
「お前の予知能力って、まだあるのか？」

「さあ……どうかしらね。稍仰木君は、何でそんなこと訊くの？」
「昨日、ニュースで、ほら……あの奈割ルピが世界終了を宣言しただろ？　だから、もしそれが本当なら、加藤も同じような事を予知してるんじゃないかって」
そう思って、と続ける語尾が段々弱っていく。
加藤は「そんなこともあったわね」と相変わらず動かない表情のまま言って、教科書やらの整理を始めた。
「正直に言うと、世界は終わらないわ」
「え……？」
「しかし驚いたものね。
あんな小学生の頃の話を、まだ覚えている人がいただなんて。
しかも、こうして予知能力を信じているだなんて。稍仰木君ってバカなの？」
「ば、バカって……！　僕はただ、本当に世界が終るのかどうか気になるだけだよ」
むっとして言い返すと、加藤は「へえ」と教科書から此方を見た。
「そんなに気になるの？　世界が終わるとか」
「加藤は、気にならないのかよ」
「私？　私は、そうね。
奈割ルピが言った事は嘘だと思っているから」
「何でそう、言いきれるんだ……？」
やけにずばっと言いきった加藤に、静かに訊いてみる。
加藤はしらっとした表情で、だが若干得意げな響きを持たせて、
「私、自分の目で見たものしか信じないから」
と言うのだった。
「……そ、そんな理由？」
思わず本音が漏れる。
そんな僕に、加藤は目に見えて嫌そうな表情を浮かべた。
「稍仰木君みたいに、周りに嘘ついて話が合うふりをしてる人間に言われるのは不快だわ」

「なッ……！」
図星だけに、言い返せなかった。
握りしめたこぶしが、震える。
「た、確かにその通りだよ……ごめん」
「……あー、それよ。
　そういうのが気に入らないんだわ」
俯く僕を前に、加藤は机を蹴り上げた。
静かな教室に、暴力的な音が響く。
「誰かとの話し方にまでつべこべ言う気はないわ。
　ただ私の前ではそんな弱気な態度でいないでくれるかしら。
　今まであなたも含め人間観察していたけれど、本当一番イライラする人間なのよ、あなたは」
「な、何でそんな事……」
立ち上がり、胸倉を掴まれた。
女の子にこんなことされた経験ある人って少なくないか！
心臓ばくばくな僕から視線をそらさず、怒気を隠そうともしないで加藤が口を動かす。
「私、嘘吐きが大嫌いなの。
　いや、上手な嘘吐きなら好きよ、言ってる事が本当のように聞こえるもの。
　でも、あなたみたいな下手な嘘つきは大嫌い。
　何媚びてんのよって思うわけなのだわ」
「わ、わかった！　わかったから！」
僕が言うと、加藤は手をおろしてくれた。
「わかった！　もうお前の前では嘘つかないって約束するから！」
「っていう言葉がもうそれ自体嘘じゃない」
言い返せない僕が確かにそこにいて。
「もういいわ、疲れた。
　二度と話しかけてこないで」
何故か好感度を滅茶苦茶下げてしまった僕もそこにいたのだった。

（5）偽善詐欺

僕は僕なりに考えた結果、ひいてだめなら押してみる事にした。
授業の合間――
「加藤、話を――」
「する気は無いわ、ばいばい」

休み時間――
「なあ加藤、話が――」
「私には無いわ、悪いわね」

放課後――
「加藤、話がだな――」
「はぁ……あなたって思った以上のバカね。
話しかけてくんなって言ってんのにまだ来るわけ？」
「媚びるなって言ったのはお前だろ」
「……ふん……そうだったわね」
仕方ない、と加藤。
やっと話を聞いてもらえる！　と感動する僕に、加藤は一言「呆れたわ」と付け足した。
「稍仰木君なら、ああして突き放せばすぐに再起不能になるかと思ったのに……。
何、そんなに気になるの？　本当かどうかも分からない私の予知能力とか、厨二病じみたものが？」
「再起不能、か……そうだな、僕はもう、将来詐欺師にしかなれないくらい人生には挫折している自信がある」
だけど、
「僕だって久しぶりにこんな、何て言うのか、うん！　頑張ってんだよ！　だから、加藤にも真剣に話を聞いて欲しいと思うし、その、

えっと、真剣に僕に付き合って欲しいんだ！」
下校時間を少し回った教室には、僕たち以外いない。
吹奏楽部の合奏の音が少し聞こえるくらいの世界で、僕は声を大にしてそう言った。
言う事言えたと思うが、加藤はというときょとんとした表情で僕を見ていた。
というか、動きが停止していた。
はじめてみる無表情以外の顔がこれっていうのも、何だかなぁ……。
「か、加藤？」
呼びかけてみると、加藤はハッと我に戻ったようだった。
「ええ、そうね、いいわ、いいわよ。
この加藤夜輪梨、稍仰木彰君、あなたに真剣に付き合ってあげましょう」
「加藤！」
加藤の顔が若干赤い気がするのだが、気にせず加藤の手を握ってしまった。
「そんなに感激してくれると、こっちが嬉しいわね。
で？　私はこれからどうすればいいのかしら」
「ああ、それだけど――」
「……稍仰木くんと、加藤さん……？」
これからの事について話そうとしていると、突然教室に僕達以外の声が響いた。
教室の入り口の方からしたその声には聞き覚えがあるが、しかし聞き慣れてはいない。
女の子の高めな声だった。
姿をとらえようと振り向く。
その子はクラスの学級委員を務める八乙音子だった。
「八乙……？」
「稍仰木君、気持ちは凄く伝わったわ。
だからまず、私と手を離しましょうか」

つないだままだった加藤の手を「あ、ご、ごめん！」と謝りながら離す。
加藤はしらっとした冷めた態度で、八乙を見た。
一方八乙は、……何故か大きな瞳から涙をぼろぼろと落としていた。
「や、八乙！　お前どうしたんだよ……！」
「え、やだ……そんな、稍仰木くん……信じてたのに……！」
何やら僕にはわからない事を泣きながら言う八乙に、加藤はひとり冷静に僕に耳打ちする。
「……ほら、あなたお得意の嘘を披露して頂戴」
「どういう意味だよ……」
僕の言葉を無視して、加藤は八乙に話しかけた。
「ねえ八乙さん、あなたは誤解をしている」
「誤解……？　そんなの嘘だよ！　加藤さんは嘘をついてるんだよ！　私に稍仰木君を取られるのが怖いんでしょ？」
「……」
うわあ加藤がドン引きしてる！　じゃなくて、これは一体どういう状況なんだ？
僕があたふたしていると、八乙は涙をこぼしたまま、僕達に歩み寄ってきた。
「稍仰木君は私のものなんだから……加藤さんも誰も、稍仰木君に触っちゃだめなんだから……」
ふらふらとおぼつかない足取りで僕より加藤の方へ行こうとする八乙。
いつの間にとりだしたのか、右手にはナイフ――！
「や、八乙！　待てって！」
そんな物騒な物を見たら黙っていられるわけがない。
僕は加藤をかばうように、加藤の前へと出た。
八乙が目を大きく見開く。
「稍仰木君、その女をかばうの……？　私の味方じゃないの？」
「庇うとか、味方とか、そういうんじゃないんだよ……。

八乙、落ち着いて話し合おう、な？」
必死に呼びかけるが、八乙にはまるで聞こえていないようだった。
「私、こんなに稍仰木君の事が好きなのに！」
八乙がナイフを振り上げ――振り下ろす前に、僕は叫んだ。
嘘しかつけない詐欺師の、精一杯の偽善行為――。

「僕も八乙が好きなんだ！」

「――えっ？」
八乙の気が緩んだのを見て、その手からナイフを取り上げる。
ちらりと加藤の顔を窺うと、驚いたように目を丸くしていた。
「加藤が言ったのは本当だよ。
八乙は誤解してるんだ。
僕は加藤に用があって話していただけで、本命は君だよ」
舌がもつれそうになるのに耐えて、八乙に嘘の告白を告げる。
「加藤さんと手をつないでたのも、偶然？」
「そうそう、つい話が盛り上がっちゃって、さ」
「真剣に付き合うとか言ってたのも……違うの？」
「ああ、話に付き合ってくれるって話だよ……」
僕が言うと、八乙は脱力したようにその場に座り込んだ。
「八乙……？」
「私たち、両思いだね！」
とびきりの笑顔を見せて僕にそう言う八乙。
後ろを見ると、加藤が皮肉気な笑みを浮かべていた。
はじめてみる笑顔は、真っ黒だった。

（6）予知

「――リア充おめでとう」
「やめてくれ、笑えない」
加藤の言葉にそう呟くように言い、僕は帰って行った八乙を思う。
「びっくりしたわ。
　女の嫉妬って怖いわね」
「ああ、まったくだよ」
八乙はひとりルンルンと音符を撒き散らして帰っていってしまった。
残された僕と加藤は、それぞれ鞄を持つ。
「まあ、帰ろうか」
「そうね、じゃあ話は帰りながらにしましょう」
静かな廊下へ出て、足を動かしながら、僕は今朝と同じように奈割ルピの話を振った。
八乙の事はどうにかするしかない、これ以上は考えても無駄だ。
「――そうね、最初から正直に話すわ。
　まず言わなくちゃいけないのは、私が奈割ルピ同様、世界終了の前兆であるという、全国各地で起きる大規模な災害を予知していた事」
「地震とか言ってたな」
「そう、地震から始まり、二次災害とかが生じるわけよ。
　で、ここからが奈割ルピと違うのだけれど」
特別教室を通り過ぎて、昇降口に出る。
下駄箱から靴を取り、履き替える。
「私は、世界終了を予知してはいない」
「え……？」
学校から出て、加藤が緩やかに吹いた風に長い髪を揺らす。
「確かに災害を予知したのだけれど、私の予知では世界は終わらないのよ。

だから私は、奈割ルピが嘘をついていると思う」
「嘘って……、何でそんな事をする必要があるんだ？」
「そこまでは流石にわからないわよ……。
それに、実を言うと、私の予知能力は弱まってきている」
「弱まる？」
訊き返すと、加藤は頷いた。
「調度、世界が終らないとわかるところまでで……そこから先を見る事が出来ない」
「世界が終っているから予知できないとか、そういうのではないのか？」
「世界が終らないというのは絶対よ。
災害が起こるが大丈夫だと、声が聞こえるの。
それから先は見えない」
でも、と加藤は続けた。
「でも、奈割ルピが嘘をついているのもまた、絶対よ」
「……」
「あら、信じられないといった風な顔ね」
加藤に指摘され、「いや……」と弁解する。
「いや、やっぱ自分で見てないから……正直半信半疑なんだ。
加藤には悪いと思うけど……」
正直な感想だった。
信じていると言うより信じたい、だけれど自分の目に無い物は……。
「まあ、それが普通の反応よね」
加藤は表情一つ変えずにそう言った。
「もう少しで別れないとね、あそこからは方向が違うわ」
「ああ、そうだな……」
加藤に言われて気づく。
思っていたより、僕は真剣に話していたようだ。
真剣に話して欲しいと言ったのは僕だったが、今はまるで逆の様。
加藤が口を開いた。

「――明日、八乙音子が殺されます」
「……は……？」
「だから、あなたが心配する事は何もない。
そうね、ついでにいうと、明日八乙音子の机からあなたのハンカチが出てくるわ」
「加藤？」
「ハンカチの色は紺色。
ねえあなた、これは明日の予知よ。
楽しみに明日を迎えると良いわ」
そう言って、加藤は「じゃ」と僕とは違う方向へと歩いて行った。
深く聞かないまま明日を迎えていいのか迷ったが、加藤がそんな変な嘘をつくはずもないと思いなおし、僕も家へと向かった。
もし加藤の予知が当たったそのときは、僕は加藤の言う事を全て信じなくてはいけなくなる。
人の言葉を信じきると言う行為は、僕にとって難しすぎる、怖すぎる事だった。

（7）トラウマ

加藤の言っていた『八乙が殺される』、『八乙の机から俺のハンカチ』という言葉を思い出しながら、小武海さんとカレーを食べる。テレビではやはり奈割ルピの世界終了なる言葉が連発されていた。アナウンサーのお姉さんの顔が、若干やつれて見えるのは気のせいだろうか。

「しっかし、何かきいた事あるのよねー」

小武海さんがテレビを見ながら言った。

「え？　世界終了って奴ですか？」

「そうそう！　聞いたんじゃなくて見たのかな……。

何か思い出せそうなんだけど、なんだっけか」

「……まあ、小説とか漫画とかでも聞きそうですよね、世界終了って言葉」

「ひっかかるなぁ」

テレビに顔を向けながら、小武海さんは眉間にしわを寄せた。

「なんだったっけ……」

そんなに気になるのだろうか……。

＊＊＊

小武海さんが帰ってから、シャワーを浴び、今日はもう寝る事にした。

ネットでも漁ろうかと考えたが、やはりその気になれず。

夜ふかし常習犯と言ったのが嘘だと思われそうであるが、今日も僕は早めに眠りについた。

＊＊＊

――夢を見た。
周りは見慣れた教室……しかし、現在使っている2年4組の物ではなく、小学校の頃の教室だ。
『みんな仲良く楽しい3年1組』なんて字がいろんな色の画用紙に描かれ、壁に貼られている。
僕は口元を押さえた。
やけにリアルな嘔吐感を感じたのだ。
生徒はいないようで、そとはオレンジ色の夕日に照らされている。
今は放課後とみるのが普通だろうか。
自然と過呼吸になってきたのを、何度も深呼吸して耐える。
口元からは手を外し、近くの机に置いた。
少しして落ち着くと、僕は教室の床に寝ころんだ。
若干、まだ息は荒い。
「……駄目だ、駄目だ駄目だ駄目だ」
此処は駄目なんだ。
どうして今になってこんな夢を見るのか。
「駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目なんだよッ！」

＊＊＊

「――ッ！」
声にならない悲鳴をあげて、飛び起きる。
全身汗だくで、寝巻が体に張り付いていた。
吐き気を抑えて、心を落ち着かせる。
「……」
……あれは、いわゆるトラウマと言う奴だ。
僕が嘘をつくようになったきっかけとも言える、トラウマ。
僕はあの頃――
「駄目だ」
あの頃の事を思い出すのはまた今度だ。

さあ寝よう。
お前なら寝れるはずだぞ、僕。
ほら寝ろよ寝ろ。
寝ろってば。

その日、結局一睡もできずに朝を迎えた。

（8）結果

「……何その顔」
加藤に言われて、僕は苦笑いした。
「昨日、眠れなくて……」
「あら、そうだったの」
相変わらず無表情で淡々と返事を返すだけの加藤に笑いながら、僕は八乙の席を見た。
「……」
彼女はまだ登校してきていないようで、その席に座るものはいない。
「今頃死んでるんじゃない？」
加藤の声に、
「そんな事言うもんじゃないぞ」
と注意を入れるが、心の中では加藤と同じことを考えていた。
加藤の予言通り、八乙は殺され――
「皆席につけ！　八乙の事で話がある！」
「……ほら」
席につこうと加藤の席から離れようとした時、加藤と先生の声が重なった。
加藤の声は小さく、先生の声に消されたけれど、僕ははっきり聞いた。
　がやがやとしていた教室の中は静まり返った。
先生が焦り気味に言葉を紡ぐ。
「八乙が今朝刺された。
　今病院に向かっている」
それだけの言葉でクラスは再び喧騒を取り戻し、僕はそれに紛れて加藤を見た。
加藤は呆れたような顔で先生を見ているだけで、此方に気づこうともしない。

仕方ないので先生の方へ視線をずらすと、先生は忙しそうに僕らに自習してろと告げた。
そして恐らく職員室へ向かう先生を見送ったと思うと、クラスの皆は立ち上がり、各々の友人達と話し合うのだった。
僕も続いて加藤の席へ行く。
「加藤！　八乙って……」
「……言った通りの事が起きるだけよ。
八乙音子は……助からないわ」
周りに気をつかったのか、言葉を包む加藤。
「ああ、そう……稍仰木君、この後学校は終わり、あなたは先生から八乙さんへプリントを渡す事を頼まれるわ」
「……そう、なのか」
「ええ。
ちなみに、私にはこの後の事がよく予知できていない……だから、まあ用心して行った方が良い」
「用心って……」
大袈裟だよ、と言おうとしたのを加藤に遮られる。
「たかだか嫉妬で刃物出してくるような女よ、用心に越したこと無いわ。
一応、私もついていくけれど」
加藤の言葉に「え」と声が漏れる。
「ついてきてくれるのか？」
「私に関係あることしか予知できないもの。
ぼんやりでも見えたと言う事は、私はあなたについていったという事なのでしょう」
だったら従うだけよ、と。
そういうもんなのかと返事をしようと思ったら、放送が響いた。
『――今日はこれまでで下校時間となります。
速やかに下校しましょう』
「まあまあ、勝手だこと」

加藤がポツリとつぶやくように言う。
放送は続いた。
『2年4組稍仰木彰君は、職員室に来て下さい』
「……確かに勝手だ」
僕もつぶやいた。

（9）巫女の予言

職員室で、加藤の予言通り八乙宛のプリントを頼まれた。
プリントの中身は八乙の家族に渡せばいいらしい代物。
なぜ僕に渡すのかと聞けば、生徒の代表として、だそうだ。
学校側もあたふたしているみたいだし、僕は加藤を連れて八乙が運ばれた病院を目指していた。
遠い場所ではないので、加藤の「車を呼びましょうか」という提案は断った。
歩いていて思うが、やはり此処は田舎だ……。
誰ともすれ違わない。
八乙の死にどこか冷めた心を抱きながら、僕は歩いていた。
「……しかし、不思議ね」
突然加藤が口を開いた。
「何が不思議なんだ？」
「私と稍仰木君がこうして一緒に歩いているだなんて」
「……確かに、不思議だよな」
今まで話した事もなかったような女の子と、こうして。
「――あのね、今だから言うけれど」
加藤は言う。
「実は、昨日八乙に刺されそうになった時、私の予知ではあなたが刺されて死んでたのよ」
加藤の言葉に息が詰まる。
「……マジで？」
「マジマジ、大マジ」
何だかノリノリだな、加藤……。
「だから、正直にいうと、この未来を予知できていなかったの。
八乙のお見舞いに稍仰木君と行くなんて、ね」
「でも――」

でも。
「それなら、何でさっき僕がプリントもらう事を言い当てる事が出来たんだ？」
「本当なら八乙が行く事になっていたのよ。
だから、それが入れ替わったという風に考えただけ――そう言うと、八乙がハンカチを机に入れてないかもしれない可能性も出てきたわね」
「ああ、例の僕のハンカチか……っておい、じゃあ何でお前は八乙が殺されるなんて言い当てられたんだよ」
「時期が変わっただけで、八乙は死ぬ運命にあったのよ。
順番的に、次はこうなるだろうと思っただけ。
……ここから先はもう、私の予知なんて世界終了が嘘だと証明する事ぐらいしかできないわね。
悪いけど、あまり頼らないで」
「……ああ、世界終了の事を聞けただけ、よかったよ」
「あら、そういってくれると有難いわね」
「あ、でもさ、加藤？」
何よ、と加藤が此方を向かずに訊く。
「予知に従っただけとか言って僕についてきてくれたけど、それはどうなるんだ？」
「……なんでしょう……なんでいうのかしら、面白くなった？」
「いや、訊き返されても……」
「うん、でもそんな感じよ。
私の予知を良い意味で裏切ってくれる人がいたのだから、まあ面白くもなるわ。
この調子で、でも最後は世界終了を私の予知通りにしてくれたら満点ね」
「はは……何させる気なんだか……」
病院が見えてきた。
「そろそろだけど……、あの、世界終了の予言、もう一度聞かせて

もらって良いか？」
「勿論」
加藤は足を止め、僕を見て言った。
はっきりと。
「世界は終了しません」

（10）病室

当然、病院内は静かだった。
僕達は受付で八乙の病室を聞き、その階へとエレベーターをつかって上がっていく。
八乙の病室まで行くと、僕がその扉をノックした。
八乙、流石に個室を取ったらしい……。
僕のノックの後に、何故か男の人の声で「どうぞ」と聞こえた。
加藤と顔を見合わせて、互いに不思議に思いつつ、僕は病室の扉を開ける。
「――……音子の友達かな」
中には大人と思しき落ち着いた雰囲気の男性がひとりと、ベッドの上に横たわる八乙がいた。
「ええと……八乙音子さんに届けるようにと言われてきたのですが……」
正確には八乙の家族に、だけど。
僕が言うと、その男性は「ああ」と言って、僕の持つプリントを受け取った。
「挨拶が遅れてごめん。
俺は音子の兄だよ」
柔らかくほほ笑むその男性――八乙のお兄さん。
あらためて顔を向けられ、素直に綺麗な顔をした人だと思った。
実際加藤も落ち着かなさそうにしている。
……そんなにそわそわしてどうしたんだよ、こいつもしかして面食いなのか？
僕に反応しなかったのはおいどういうことだ――と訊くわけにもいかず、僕は八乙のお兄さんに、とりあえず八乙の様子を聞いた。
「あの、八乙さん……大丈夫なんですか？」
「……大丈夫じゃないね。

今日中に息を引き取る可能性が高いと、医者が」
神妙な顔つきでベッドの上の妹を見るお兄さん――だったが、それもつかの間、僕達を見て言った。
「俺の事は堆虎（てとら）でいいよ。
八乙って言ってちゃ、どっちかわからなくなっちゃうし」
「あ、僕たちこそ挨拶が遅れました！　すみません。
僕は稍仰木彰です」
「私は加藤夜輪梨です」
僕らが言うと、お兄さんもとい堆虎さんは「稍仰木君？」と僕の名前を繰り返した。
僕は疑問符を頭に浮かべて「え？」と言う。
「音子の彼氏の稍仰木君？」
「……はい？」
僕の間の抜けた返事を聞いてか、加藤がぷっと吹き出した。
「何でもないわよ」
しかし無表情を通す加藤。
……何だか変な感じだ。
「あ、勘違いだったらいいんだ。
音子には妄想癖があってね。
だからまあ、また妄想と現実がごっちゃになってたんだろ」
「……」
思わず黙り込んでしまう。
罪悪感で死にそうだ……！
ここはいっそ自白――
「ああ、それなら稍仰木君が嘘をついたんですよ」
「加藤ッ！」
僕より先に言いやがった加藤の肩をつかむが、加藤は「本当の事じゃない」と笑った。
何でこいつはこんな意地悪な笑顔しか浮かべられないんだ！
しかしそんな僕等をよそに、堆虎さんはどこか嬉しそうにすら思え

る表情で、僕を見た。
「稍仰木彰君、ね……」
「え、あ、あの、すみませんでした！　これには深いわけがあって……」
あなたの妹さんが切りかかってくるものですからその場しのぎに、なんて言えるわけがないのだけれどいいわけが口をついて出た。
それでも堆虎さんは表情を崩さず、――僕の頭に手をおいた。
「え……？」
混乱する僕の頭上から、堆虎さんの声。
「稍仰木君は、俺の知り合いの詐欺師にそっくりだな」
「さ、詐欺師……ですか……？」
「ああ、嘘を武器に世界を敵に回すとか言う、厨二病こじらせた男でね。
悪い子ではないんだが、捻くれているんだ……」
にこり、とこっちの気がゆるむような笑顔を浮かべて。
「プリントはしっかり受け取ったよ。
そうだ――これ、名刺ね。
稍仰木君も加藤さんも受け取って。
何か聞きたい事や困ったことがあったら、是非頼ってくれ」
受け取った名刺には、八乙堆虎という名前と、電話番号が３つ書かれていた。
「みっつ？」
疑問を声にしたのは加藤だった。
「ああ、全部俺の番号だから安心していいよ。
とある都合で携帯を３つ持ち歩いていてね」
「はあ……」
まあどれでも気分でかけてくれ、と堆虎さん。
僕等はお礼とともに受け取った。
「――さ、じゃあそろそろ帰りなよ。
わざわざありがとうね。

……君も、嘘を武器に世界をだませるくらいになってくれな」
僕に向けて言われた言葉だと理解しても、どんな返事も返せなかった。
ただ、
「詐欺師になる気はちょっと……」
と、嘘をつく事は出来た。
詐欺師という言葉に眉をひそめる加藤に手を引かれ、僕達は病室を後にした。

（11）破った名刺

「……八乙ちゃんはどうなりそうだ？」
彰と夜輪梨が帰った後の八乙が眠る病室に、そう声を響かせる男が入ってきた。
隣には紫色の胡散臭いローブを被った、世界終了で世界を騒がせるあの有名占い師・奈割ルピの姿。
どうやら男が声をかけたのは奈割ルピにらしく、彼女が答えた。
「今日中に死ぬわね」
可愛らしい少女を連想させる高めの声で、さらりと答える奈割。
「お前等、本人の前で言ってやるなよ」
そう言ったのは八乙音子の兄――八乙堆虎。
ベッドの隣のパイプ椅子に腰掛ける彼の近くへと、2人が歩み寄る。
続いて口を開いたのは、堆虎ではない男だった。
「まあいいじゃんか、八乙ちゃんはよくやったよ。
実の兄に刺されるなんて……、同情するよ」
「人殺しになるのって最悪な気分なんだぞ、居連（いつら）」
居連と呼ばれた男はベッドの上に眠る八乙音子を見て、ふんと鼻を鳴らした。
「八乙ちゃんが一番気分悪いだろうけれど、ねぇ」
「それはまあ否定しないさ――で、奈割？」
堆虎の声に奈割ルピがはいはいと返事をする。
「今日、さっきの稍仰木彰から電話がかかってくるのは、誰だったかな」
「今日？　ええとねぇ……ああそう、隆樹（りゅうき）よ」
「あ、俺だったか……」
居連が楽しげに口元をゆがませる。
「――俺と同じ大嘘吐きなんだったっけか……、楽しみだねぇ」

＊＊＊

「――稍仰木君に話があるわ」
病院から出て家路をたどる途中、加藤はそう切り出した。
「私の頼りにならない弱り切った予知能力が今夜の事を予知しました」
「な、何でそんな自虐的な表現をするんだ……」
「本当の事よ。
で、普段なら私に関係あることしか予知できないんだけれど、今回は良い働きをしたようね。
あなたの事を予知しました」
僕の事？　と加藤の方を向く。
しかし加藤は正面だけを見つめて歩いていた。
気にせず「どんなことだよ？」と訊いてみる。
すると加藤は、病院でもらった八乙堆虎さんの名刺を目の前で破り捨てて見せた。
「お、おい加藤……！」
「勘違いしないで、稍仰木君。
私が見たのは、今夜寝る前にあなたが八乙堆虎――この名刺に書かれた番号に電話する場面なの」
風に名刺の屑がさらわれていく。
僕は加藤の言葉に疑問符を浮かべた。
「何か問題でもあるのか？」
堆虎さんに電話するなんて、相談したいような事が起こるのだろうか……。
そういう意味合いで加藤に訊いたのだが、加藤は首を横に振った。
「逆に、八乙堆虎に電話をかける事が問題なのよ。
言ったように、私の予知能力は低い。
だからぼんやりとしかみえなかったけれど……あなたがかけた番

号先は、八乙堆虎ではないのよ。
　あの男、顔が良いだけみたいね。
　こんな嘘を仕込んでるなんて」
眉間にしわを寄せる加藤。
口調に抑揚が無いから読み取りづらいが、怒っているように見えた。
「内容まではみえないのか？　相手が誰かとか……」
「内容……あのハンカチについての話が出そうね。
　それと、相手が見えるわけではないけれど……何だかあなたに似ているような、似ていないような……まあ、男よ」
「途端にアバウトになったな」
「仕方ないじゃない、ここまで働けばいい方よ」
まあ、それは僕が口を出せる事ではない。
「はあ、しかし――僕は世界終了の真相を突き止めたいだけなのに、何だか邪魔されてる気がするな……」
「面白い被害妄想……じゃない、解釈ね」
「お前せめて本音か建前かのどちらかにしろよ」
あんまり傷つけて欲しくはないものだ。
加藤って本当にしゃべり方が淡々としていて、言っている事の真偽がはかれないのだ。
「私の事は良いじゃない、続けて頂戴」
「いや、何て言うかさ……世界終了について加藤に訊いたら八乙に殺されかけて、それで今堆虎さんに嘘つかれたことが分かって……、展開が早いよ」
「まあ、確かにそうかもね」
加藤が頷いた。
「そうだ、電話の事だけれど……」
「ああ、しないようにするよ」
「わかってるようね、頼んだわよ」

（12）楽しい一時

まだ結果がわからない加藤の予言――だがしかし、彼女を疑い続ける気もない。
加藤が告げる言葉を素直に信じ、加藤と別れ、僕は今家についた。
「ただいまー」
「おかえりー」
「……小武海さん？」
普段なら聞こえてはいけない「おかえり」の声がした方へ行くと、小武海さんが台所で料理をしているところだった。
僕を視界に入れると、小武海さんはほほ笑んだ。
「ふふ、驚いたでしょ」
「驚きますよ……！　今ってまだ……」
壁に掛けた時計を確認し、
「１１時ですよ！」
と小武海さんに言う。
「それに、カギは……！」
「ああ、今日は仕事殆ど無いようなもんだったのよ。
それと、カギに関しては彰君も人間だったと言う事よ」
「どういうこと……」
ですか、と言いかけて。
僕は今朝の事と自分にあり得そうな事を考えてみた。
そして、ひとつの答えが浮かび上がる。
「も、もしかして……」
「そう！　カギ閉めていくの忘れてたぞ！」
小武海さんに言われ、僕は「うわぁ」と小さく口に出した。
前回空き巣に入られたくせに、まだこりてないのか？　僕は……。
「まあ落ち込まない落ち込まない。
こんな失敗よくあるわよ。

でも最近は物騒だから気をつけてね？」
まさにその物騒な時代の物騒な方々に空き巣に入られたり殺されかけたりされているのですが……。
まさかそんな事を小武海さんに言うわけにもいかない。
教えたら、絶対小武海さんは僕を心配するだろうから……。
小武海さんにはいろいろお世話になっているし、余計な心配ごとを増やしてやりたくない。
「いや、でもごめんね、常識ないことして」
「え……？」
急に小武海さんが謝罪の意を述べてきたので、僕は思わず疑問の声を発する。
「普通誰もいない家の中に勝手に入るのって犯罪よ？　いくら出入りを許されてるからって、申し訳ないことしたわ」
「そ、そんな！」
僕は思わず大声でそれを否定する。
「小武海さんは家族同然の存在だと思ってるんです、僕！　だからその、全然使って頂いて構わないと言うか……」
語尾が段々消え行ってしまうが、小武海さんは僕の気持ちを読んでくれたらしく、「ありがとう」と申し訳なさそうに笑った。
「でもそういえば、何で彰君はもう帰ってきてるの？　早退？」
「あー……」
これは言うしかないか……。
僕は八乙が何者かに刺され、病院に運ばれた事。
そして無責任な教師によってプリントを届けにいかされた事を告げた。
「そんな事が……」
小武海さんはつらそうな目をして、いったんエプロンで手を拭いた。
「本当、最近は物騒になってきたね」
「……そう、ですよね」
僕だってびっくりだ。

自分を殺そうと――正確には加藤を刺そうとしたのだろうが――した奴が逆に刺されて、しかも加藤にあんな予言をされているなんて。
「その八乙って子、すぐ学校に戻れると良いね……。
命にかかわるようなほどぐさっといかれたの？」
「いえ、それは……」
何と言ったものかと悩んだが、小武海さんはそれを「わからない」という意味で取ったらしく、「わからないよね」と頷いた。
「彰君も気をつけてよ」
「はは、僕は刺されるようなことしてませんからね」
「どうだかわかんないよー」
「う……」
確かに……。
今まで嘘つきまくって生きてきたし、勿論その事で揉めた事もあった……。
あまり八乙を悪く言えたもんじゃないな。
「なんてね！　彰君は良い子だから、そんなこと無いよね！」
「……」
……狙ってんのだろうか、この人は。

（13）本物詐欺師と偽物詐欺師

昼食は小武海さんと軽めに取って。
僕は自分の部屋にこもっていた。
昼ほどやる事が無い時間もない。
僕は買い物に行ってくると言う小武海さんを送り出し、とりあえずパソコンを起動させたものの何もすることが無いと言う事態に陥っていた。
某ニュースサイトを見ても世界終了についての良い情報は得られないし。
奈割ルピもあれからはそれ以上の情報を出してはいないようだった。
ブログはまあ、言わなくても分かって頂けそうなものだ。
ゲームもする気が起きないし漫画はもうすでに読んだ事がある物ばかりだし……。
何をしようかと考えながらもパソコンのメールフォームを開く。
「……誰からだ、これ？」
知らないアドレスから（件名なし）で届いたメール。
開くのは危険かと思いつつ、好奇心に負けてクリックしてしまった。
クリックしたのとほぼ同時、僕の携帯も鳴る――。
「あ、はい、もしもし」
此方も知らない番号からなのに、何に焦ったのか電話に出てしまった。
僕が声を発すると、相手からの声も勿論返ってくる。
「やあやあ初めまして！　稍仰木彰君だね？」
若い男と思しき声だった。
自分の名前を言い当てられ、不審に思いながらも言葉をかわそうとしてみる――が、僕が口を開いた時、相手が言葉を発した。
「君は今不審に思っているのだろうねぇ。
どうしてこの相手は自分の名前を知っているのか？　いったいど

こから電話番号を入手したのか？　そして、電話の向こう側にいる相手の正体とはいったい？　とまあ、そんな感じに。
今は俺が会話の主導権を握っているようなもんだからそれに答えないという手もあるのだけれど、俺は小さな子供からご老人の方々にまで『強きを挫き弱きを助ける心優しいとっても素直な正義のヒーロー』という扱いを図らずとも受けてしまうくらいの善人であるから、答えないなんて選択肢を選ぶわけがないんだけどね。
っと――」
「……」
相手は間を開け、僕の無言を上手く利用してタイミングをはかり、名乗った。
「あらためて初めまして！　俺は居連隆樹（いつらりゅうき）。
君より5年ほど長く生きている19歳だ。
あだ名は詐欺師で職業はりゅうちゃん……じゃなかった、逆だ、うん、もういいや。
君の事は八乙から聞いたよ。
俺にそっくりな子だって」
「……確かに、さっきのヒーローがどうとかいう自己紹介だか何だかわからない話を聞いて、この人は嘘つきで間違いないと確信したところですけれど……。
堆虎さんの言っていた詐欺師の方ですね。
早く自首してください」
何だかよくしゃべる人なんだなぁと思いながら、でも確かな自分との共通点を見つけたからか、つい冷静に返事をしてしまう。
詐欺師と言うからには名前も偽名を使われている可能性があるが、仕方ないので居連さんと呼ぼう。
一応年上っぽいし。
「あ、そうだ。
俺にはタメ口、呼び捨てで構わないよ。
俺に似てる子で間違いないみたいだから、特別ー」

「はあ……じゃあ、まず訊かせてもらうけど」
さっそく呼び名を変更だ。
「居連はどこで僕の番号を知った？　それと、未だに開かないメールはお前のか？」
「おや、俺とした事が番号の事を教えてなかったね。
番号とアドレスは情報屋から買ったのさ。
そのメールは間違いなく俺からのだよ」
「……何でそんなことを？」
「八乙から話を聞いていて、あんまり自分に似てるって言うもんだから気になっちゃってね。
大体知らない番号でもないだろ？　奴の名刺に書いてある番号の1つ目が俺のだしな」
あの名刺は加藤が破り捨てちゃったんだよな……。
しかし……ということは、加藤の言っていた僕がかける事になっていた電話の相手が、この居連とか言う男ということで間違いなさそうだ。
「今なら君の知りたい情報なんでも教えてあげよう。
情報屋みたいなことする気はないけど、まあ縁は大事にしようじゃないか。
さあ、人生の先輩にいってごらんなさいなー」
「……世界終了」
「ん？」
「お前も知ってるだろ？　奈割ルピが世界終了の予言を出した事。
あれについて詳しい事が聞きたい」
「は？　お前あんなことについて聞きたいの？」
何やらえらいテンションが低くなったような気がしたが、思ってみればこれが普通の人の普通なテンションなんだよな……。
居連が僕に続けて問う。
「まあ問題ないけど、何でそんな事がききたいんだ？」
「何でって……」

以前加藤にも聞かれた問いに、中々答えられない。
何故だろう――？
考える僕に、居連はひとりごとのように気軽に言い放った。
「こんな世界、どうなってもいいだろうに」
「……それは」
それは――。
「それは、違うんじゃないか？」
「は？」
居連の間の抜けた声を気にせず続ける。
「僕は、この世界がどうなっても良いだなんて思わない。
世界終了なんて、寂しいっつーか……嫌じゃん」
言っていて驚いた。
僕は、また、嘘をついているのだろうか？
「……は、つまり何……、お前は世界終了が本当の事か嘘の事かを知りたいのか？　どうなっても良いと思わないってことは、そういうことなのか？」
「ああ、そういうことだ。
だから、教えて欲しい」
勢いだけでまわる舌に逆らおうとせず。
「世界終了の真偽を……！」

（14）電話を切って

「うんわかった、待ってね」
居連の軽い返事から、続いて――何やら不穏な音が携帯から聞こえた。
濁点が似合う鈍い音だ……。
少しすると、居連が「あ、稍仰木くん？」と声を発した。
「お前、何してんの？　あの音……」
「中々口を割らない時の、おまじない」
ふふふと笑って、居連。
「で、世界終了だけど」
「ああ」
「本当の事で間違いないと、そう言っている奴が多いようだね。
今リアルタイムで情報屋に訊いてるけど、そりゃわかるわけないって。
奈割ルピ本人に聞くしか」
「本人に、って……」
しかもリアルタイムでっておい。
じゃあさっきの音……、想像しなくて良いか？　いい、よな。
「出来なくもないよ」
「は？」
僕が黙っていると、居連はまた軽くいってのけた。
「奈割ルピ本人とだろ？　平気平気、いいとこまでいけるさ」
「は、お、おま――」
「あ、ごっめーん。
仕事が入りました、ので！」
また連絡するよ、と。
「あ、あいつきりやがった！」
見るとメールは表示されていた。

「……」
アダルトサイトのＵＲＬがずらり……。
『楽しんでね！』のメッセージと差出人は……『居連隆樹』。
ゴミ箱に入れながら、やっぱあいつとは関わらない方がいいのではないかと考える。
いや、そりゃそうだ。
「詐欺師、だっけか……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8947y/

からっぽ詐欺師と嘘の世界

2011年12月3日23時52分発行